

あとがき

1984年の新春、あけましておめでとうございます。前号が昨年3月の発行ですので9ヶ月ぶりの発行です。廃刊になったのではないかと思われた向きもおありかも知れませんが、発刊以来最大の大穴をあけてしまいました。この責任は重々感じております。深くお詫び致します。これまでも、年4回発行のところを3回や2回になって、その度毎に苦しい言い訳をしてきたのですが、今度の最大穴は言い訳を申しあげるのもおこがましいくらい重大だと思っています。原因は多々考えられますが、いちいち申し上げるのは弁解がましくなりますので止めます。最大の原因は、報筆者も編集者も人手不足でなかなか時間を割けないことにありますが、この「ニュース」誌の性格・使命を何処に置くかと言ったことが曖昧になっていて、読者の間にある多岐に互る意見や要望を編集側で絞り切れないでいるのも大きな要因になっています。この点については、シグマ研究委員会の運営委員会やワーキング・グループ会合においてもしばしば議論されており、編集者側で音頭をとってこれらの意見を集約して対策を講ずることになっています。これも延び延びになっていたのですが、早急にやらねばならぬ時期に来ていることで痛切に感じています。先に、本誌に核データ専門誌の性格も加味することから、研究発表や情報交換の場を提供することを提案し公示しましたが、編集側で積極的な手を打っていないこともあって実質的には機能していないのが実情です。本誌は、最初、ご存知のように、「JNDC ニュース」として発刊されました。核データ活動全般を扱ったにもかかわらず、シグマ委員会内だけの連絡誌のように受けとられ閉鎖性を云々されたこともあって、より広く核データの研究者・利用者への情報流通を計かることから、「核データニュース」と名称を変更した経緯があります。最近では、シグマ委員会内のワーキング・グループの数が増えてきたため、ワーキング・グループのメンバーの間からシグマ委の中での情報流通のために本誌を利用すべきとの声が高まってきました。これは本誌の情報を発刊当初の「JNDC ニュース」時代に戻すことも意味しています。このように、核データ活動が広範になればなるほど、利用者が必要とする情報や要望も多岐に互るとともに、シグマ委自体が肥大してくるとその内部での情報交換も一層重要になってきています。これらの要望を現在の「核データニュース」誌だけでカバーすることは不可能であり、そのようなことを考慮しようとする程、動きがとれなくなることでしょう。このためには、研究発表から身近かのニュースまでの広い範囲の情報、速報として意味のある情報などそれぞれの性格に合致した結果と配布とを明瞭に区別する必要があるように思います。一誌でこのすべてのものを包含されることは無理で、「核データニュース」誌の性格・守備範囲を明確にさせるとともに、それから食み出た部分をどうするかについて対策を立てなければならないと思います。この抜本的な対策の検討のために少々時間をいたさきたいと考えています。少々と言っても今年の

半ばくらいまでは猶予をいたゞきたいところです。

新年に当り、言い訳転じて抱負めいたことを述べさせていたゞきました。今後とも、皆様のご援助を賜りたくよろしくお願い致します。